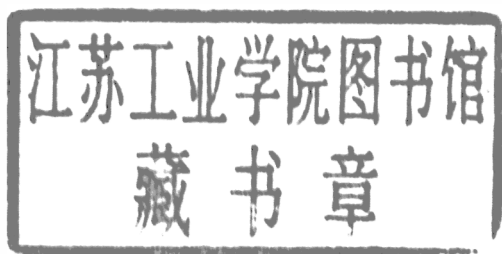


外国人のための
基本語用例辞典
(第三版)

DICTIONARY OF BASIC JAPANESE USAGE
FOR FOREIGNERS



文化庁
AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

外国人のための 基本語用例辞典（第三版）

昭和46年8月15日

平成2年10月1日

平成6年6月24日

初版発行

第三版発行

第三版2刷発行

定価5,000円

（本体4,854円・税146円）

著作権所有

文 化 庁

郵便番号 100

東京都千代田区霞が関3の2の2

電話 (03)3581-4211

発 行

大蔵省印刷局

郵便番号 105

東京都港区虎ノ門2の2の4

電話 (03)3587-4283～9

（業務部図書課ダイヤルイン）

落丁・乱丁本はおとりかえます

ISBN4-17-151302-2

刊 行 の こ と ば

近年、海外では多くの国々に日本語教育機関が設けられ、また、諸外国から日本に留学して日本語を学ぶ者が非常に増加した。

文化庁では日本語教育の充実・発展のために種々努力を重ねており、その施策の一つとして、教材・資料等の充実・整備のために意を用いてきた。

この「外国人のための基本語用例辞典」は、既に刊行した「外国人のための漢字辞典」および「外国人のための専門用語辞典」とともに、日本語教育における最も基礎的な資料作成の試みの一つである。日本語を学ぼうとするあらゆる外国人にとって、どうしても身につけなければならないと思われる基本的な語を集め、その活用・意味・使い方などを解説するとともに、きわめて豊富な具体的な用例を示して、日本語教育に役だつことを意図したものである。

この辞典は、ただ日本語を学ぼうとする外国人が学習する際に活用・利用することをねらっているばかりでなく、日本語教育に携わるかたがたにも、広く活用されることをねらいとしている。

この辞典の編集・作成にあたっては、日本語教育の専門家を委嘱し、採録すべき語の選定をはじめ、企画・執筆・編集・校閲、その他万般にわたって御協力をいただいた。

この種の辞典は初めての試みであり、それだけに何かと不備な点もあるかと思うが、これを土台として、今後さらに充実した内容のものが生まれることを期待するものである。

刊行にあたって、関係の多くのかたがたの御尽力・御厚意に深く感謝の意を表す所である。

昭和46年3月

文化庁文化部長

吉 里 邦 夫

第二版の刊行にあたって

この「外国人のための基本語用例辞典」は昭和45年度に初版を発行し、多くのかたがたに利用されてきましたが、この辞典に対する内外からの要望はかなり多いので、このたび、これにこたえるために第二版を刊行することになりました。

この機会をとらえて「当用漢字音訓表」及び「送り仮名の付け方」の改定に伴い、内容をより正確なものとするために、浅野鶴子、伊藤芳照、川瀬生郎、河原崎幹夫、高橋一夫、与世里智子の各氏に依嘱して、初版の不備な箇所について改訂を行いました。

ここに御協力くださったかたがたに厚くお礼申し上げますとともに、この辞典がさらに多くのかたがたによって利用されることを心から願うしだいです。

昭和50年 3 月

文化庁文化部国語課長

石 田 正一郎

第三版の刊行にあたって

この「外国人のための基本語用例辞典」は、昭和45年度に初版を発行して以来、日本語を学ぶ外国人や日本語教育に携わる多くの方々に利用されてきました。そして、この辞典に対する内外の要望に応えるために、改訂版の発行や増刷を行ってきました。

しかし、昭和50年度の第二版の発行後十余年が経ち、この間の社会の変化には著しいものがあります。そこで、今後ともこの辞典を広く活用していただくためにも、日本語教育専門家の御協力をいただきながら、実情にそぐわない個所を改訂し、このたび、第三版を刊行することになりました。

ここに御協力いただいた野元菊雄、伊藤芳照、上野田鶴子、加藤彰彦、川瀬生郎、河原崎幹夫、阪田雪子、水谷修の各氏に厚くお礼申し上げますとともに、この辞典が日本語教育のより一層の充実と発展の一助となることを願う次第です。

平成2年9月

文化庁文化部国語課長

河 上 恭 雄

この辞典の内容（ねらい）

- 1 この辞典は、日本語の中で特に基本的であると思われる語を中心として解説し、適切な用例を付して、外国人の日本語学習の効果を高めるのに役だつことをねらい、かねて、教師が学習者を指導するのにじゅうぶん利用できるように意を用いて編集したものである。
- 2 本書を使用する学習者は、日本語を 500 時間内外学習した外国人学習者、およびそれ以上の日本語の学力のあるものとする。
- 3 本書は学習者の立場から見れば、これまで、それほど広く、また厳密でもなく学習した基本的な語の意味・用法を再確認するとともに、さらにそれらの語についての認識を広げることがねらいとする。したがって、500 時間ぐらい学習した程度の者にだけ利用されるのではなく、それ以上の高度の学習者にも大いに役にたつものである。
- 4 本書を使用する学習者の程度を考えて、あまり特殊な意味・用法には及ばない。
- 5 基本語として採録した語は、日本語の学習書や諸種の語彙調査などに見られるものを資料とし、その中から日本語学習の初級の段階において出あうことが多い、かつ必要度が高いと考えられるもの約 4500 語を編集委員会で選定した。
その際、語の構成要素に注意を払い、基本的なものはできるだけ採録し、未習の複合語などを理解する応用力をつけるように意を配った。
- 6 本書には、採録語を解説する本文と、本書の使い方を説明するまえがきのほかに、次のような付録を用意した。
 - (1) 日本語の文法 (2) 語の構成法 (3) 親族関係のよび方 (4) 数えることば
 - (5) コソアドについて (6) 擬声語・擬態語について (7) 常用漢字表
 - (8) 索引

用例辞典の構成及びその使用法

I 見出し語

1 見出し語の書き方

見出し語は平仮名（ひらがな）で書いてあります。しかし、外来語など片仮名（かたかな）で書くのがふつうの語は、片仮名で書いてあります。その書き方は、現在行われている標準的（ひょうじゅんてき）な書き方によっています。したがって、次のような語は、ひくときによく気をつけてください。

例 おおきい〔大きい〕、おとうと〔弟〕、せんせい〔先生〕、つづく〔続く〕

2 活用語*1の書き方

見出し語が動詞・形容詞のときには、語幹*2（ごかん）と語尾*3（ごび）の間に「・」がつけてあります。したがって、動詞でも「する」「来る」「見る」などのように、語幹と語尾の区別（くべつ）がない語にはつけてありません。

例 か・く〔書く〕、お・きる〔起きる〕、とりあつか・う〔取り扱う〕、ちいさ・い〔小さい〕

形容動詞は語幹だけを見出し語として示してあります。

例 きれい、にぎやか、しずか

助動詞も、語幹と語尾の区別のある語は、その間に「・」がつけてあります。

例 さ・せる、#な・い、#よう・だ

*1, 2, 3 は付録「日本語の文法」を見てください。

3 見出し語のならべ方

見出し語は五十音順（じゅん）（あ・い・う・え・お・か・き・く……の順）にならべてあります。そのとき、平仮名と片仮名による区別（くべつ）はしてありません。そのほか、次のことに注意してください。

㊦ 濁音（だくおん）を表す仮名（が・ぎ・ぐ……、など「ゝ」のついた仮名。）や半濁音を表す仮名（ぱ・ぴ・ぷ・ぺ・ぽ）は清音（せいおん）を表すかな（「ゝ」や「゜」のついていない仮名。）と同じように扱（あつか）いました。しかし、それらがつづくときには、清音・濁音・半濁音の順にならべてあります。

例 「は〔葉〕」と「ば〔場〕」とでは「は」の方が先です。

「はち〔蜂〕」と「ばち〔罰〕」とでは「はち」の方が先です。

「はっと」と「ぱっと」とでは「はっと」のほうが先です。

- ④ 促音（そくおん）を表すかな（「がっこう〔学校〕」「きって〔切手〕」などの小さい「っ」や拗音（ようおん）を表すかな（「ちゃ〔茶〕」「きゅう〔急〕」「きょう〔今日〕」などの小さい「ゃ」「ゅ」「ょ」）も促音や拗音以外の音を表すかなと同じようにあつかいました。しかし、それらがつづくときには、促音や拗音を表すかなのあるほうがあとにならべてあります。

例 「いつか〔何時か〕」と「いっか」とでは「いつか」のほうが先です。

「しょう〔使用〕」と「しょう〔小〕」とでは「しょう」のほうが先です。

- ⑤ 外来語など、見出し語がかたかなで表記されるときに、長く伸（の）ばす音を示す「ー」は、それが全くないものとして扱ってあります。したがって、「スカート」は「スカト」、「ノート」は「ノト」と考えてひいてください。

4 見出し語の漢字表記

(1) 表記のしかた

見出し語がふつうは漢字で書き表す語である場合には、その漢字表記を、「〔 〕」に入れて、見出し語の次に示してあります。

例 ほん〔本〕。よ・む〔読む〕。

したがって、「〔 〕」に漢字が示していないものは、ふつうは漢字で書かれることのない語です。

一つの見出し語に二つ以上の漢字表記のあるときは、その用法の一般的（いっぱんてき）なものから特殊（とくしゅ）なものへと順（じゅん）にあげてあります。（その使い分けについては、意味・用法を説明したところや、用例などで注意しているものもあります。）

(2) 表外漢字の扱（あつか）い

漢字表記は、常用漢字であって、しかもその音訓表の範囲内（はんいない）で使用できるものを示すようにしてあります。しかし、社会で広くふつうに漢字表記が行われているものは、常用漢字ではあるが、その音訓表で読み方がみとめられていないもの、また、常用漢字以外の字も、それを示し、その字の上に「ゝ」をつけました。

例 あいさつ〔挨拶〕。あきら・める〔諦める〕。

(3) 送（おく）り仮名（がな）

送り仮名は、現在その標準（ひょうじゅん）とされている付け方「送り仮名の付け方」（昭和48年内閣告示）によっています。二つ以上の送り仮名の付け方が考えられるときには、文部省「送り仮名用例集」によりました。

5 品詞名**

(1) 品詞名の示し方

見出し語（漢字で書ける語は、その漢字表記）の次に、見出し語の品詞名が「()」に入れて示してあります。

例 いしゃ〔医者〕（名詞）
うご・く〔動く〕（動詞）
きっと（副詞）

ただし、一つの見出し語が二つ以上の品詞として用いられるときには、「Ⅰ，Ⅱ，……」と分けて、それぞれに品詞名が示してあります。

例 ほん〔本〕
Ⅰ （名詞）……………
Ⅱ （接尾語）……………

(2) 品詞の種類

名詞，代名詞，動詞，形容詞，形容動詞，副詞，連体詞，接続（せつぞく）詞，感動詞，助詞，助動詞，そのほか接頭語，接尾語，連語も必要に応じてあわせかかげました。

*「連語」というのは、「ほかならない」「みるみるうちに」「もしかすると」など、二つ以上の語がいっしょになって、一つの語のようなはたらきをしているものです。

(3) 名詞とⅣ型（がた）動詞*6，あるいは名詞と形容動詞の二つの用法がある語の扱（あつか）い

見出し語が名詞で、あとに「する」がついてⅣ型動詞としても使われる語は（名詞，～する），また，形容動詞としても使われる語は（名詞，～な・に）あるいは（名詞，～な・の）と書いてあります。

例 あい〔愛〕（名詞，～する）
あんぜん〔安全〕（名詞，～な・に）

*4,5,6 は付録「日本語の文法」をみなさい。

6 活用語の活用形の示し方など

(1) 活用形の示し方

動詞・形容詞・形容動詞・助動詞など，活用のある語には，活用形などが「{ }」に入れて品詞名の次に書いてあります。

動詞，たとえば「よ・む〔読む〕」では，

{ ①まーない ②みーます ③④む(ーとき) ⑤めーば ⑥め ⑦もーう }
 { ⑧⑨んーで(だ) ⑩むーだろう }

形容詞は、

{ ①くーない ②くーなる(する) ③④い(ーひと) ⑤けれーば ⑧く }
 { ーて ⑨かっーた ⑩いーだろう(かろーう) }

形容動詞は、

{ ①でーない ②にーなる(する) ③だ ④なーひと ⑤ならーば ⑧で }
 { ⑨だっーた ⑩だろーう }

助動詞もそれぞれの活用のしかたによって、上と同じようにその活用形が示してあります。

①から⑩による活用形の示し方は次のようです*7。

①は助動詞「ない」につづくときの形(動詞は助動詞「せる(させる)」「れる(られる)」につづく形もふくむ。)です。

②は、動詞では助動詞「ます」などにつづくときの形、形容詞・形容動詞では、動詞「なる」「する」などにつづくときの形です。

③は、そこで文が終(お)わるときの形です。

④は、名詞などへつづくときの形です。

⑤は、助詞「ば」へつづくときの形です。

⑥は、命令するときの形です。

⑦は、助動詞「う(よう)」につづくときの形です。

⑧は、助詞「て」につづくときの形です。

⑨は、助動詞「た」につづくときの形です。

⑩は、助動詞「だろう」につづくときの形です。

①～⑩によって、活用語の活用形が全部示されているわけですが、動詞の活用形の③、④及び⑧、⑨のように形が同じ場合は、上の例の「③④む(ーとき)」「⑧⑨んーで(だ)」のように、いっしょに示しました。また、形容詞や形容動詞・助動詞には、⑥、⑦がないのは、命令する形や助動詞「う(よう)」につづく形がないからです。

(2) I型(がた)活用動詞*8から作られる可能動詞*9の扱(あつか)い

I型活用の動詞から可能動詞を作ることができるもの(「かく[書く]→かける[書ける]」「よむ[読む]→よめる[読める]」など)は、活用形を示したあとに、「(可能)」としてそれが示してあります。

例 よ・む[読む](動詞) {①……⑩……(可能)よめる}

(3) 形容詞・形容動詞につく接尾語「き」「み」の扱(あつか)い

形容詞・形容動詞で、語幹*²に接尾語「さ」あるいは「み」がついて名詞になる場合は、活用形を示したあとに、次のように示してあります。

例 あたたか・い〔暖かい・温かい〕（形容詞）

{①……⑩……（名詞）～さ・～み}

(4) （名詞，～する），（名詞，～な・に）の活用形の扱（あつか）い

「（名詞，～する）」によって動詞としても用いられることを示した語には、その活用のしかたは示してありません。動詞「する」の活用のしかたを参考（さんこう）にしてください。

また，（名詞，～な・に）によって形容動詞としても用いられることを示した語についても，その活用のしかたは示してありません。他の形容動詞の活用のしかたを参考（さんこう）にしてください。

*7,8,9 は付録「日本語の文法」を見てください。

Ⅱ 意味・用法の説明

見出し語について，その漢字表記，品詞名，活用のしかたなどを記入した次に，その語の意味や用法が説明してあります。

1 見出し語がいくつかの意味・用法をもつ場合の扱（あつか）い

見出し語がいくつかの意味や用法をもつ場合には，「1， 2， ……」と項（こう）を分けてそれぞれの意味や用法が示してあります。

「1， 2 ……」と項を分けた中で，さらにもっとこまかく分けて説明する必要があるときは，「1， 2 ……」のそれぞれがさらに「①， ② ……」と分けてあります。

2 意味・用法の説明のしかた

見出し語の意味はできるだけやさしくて，分かりやすいことばに言いかえて説明してあります。

ほかのことばに言いかえただけでは，その語の意味がじゅうぶんに表せなかったり，特に必要な文法的なことについての説明をしたりするときは，それが「／ ／」に入れて書いてあります。接頭語・接尾語・助詞・助動詞などは「／ ／」による説明だけのことが多いです。

意味・用法の説明をするのに，まだ理解できないと思われるむずかしいことばを用いなければならなかったときは，そのことばのあとに「（＝ ）」の形で，さらにそのことばの意味が説明してあります。

3 参照語（さんしょうご）の示し方

見出し語と反対の意味をもつ語，意味のよく似（に）ている語，あるいは，見

出し語の意味や用法を理解するのに、その語もいっしょに見れば役にたつと思われる語が、意味・用法の説明のあとに、「→」によって示してあります。

また、「あおじろい→あお（5 ページ）」のように示してあるのは、「あおじろい」という語は、「あお」のところを見なさいという意味です。

Ⅲ 用 例

1 用例のあげ方

意味や用法によって分けられた各項（かくこう）ごとに、初めに「○」をつけて、それぞれいくつかの用例が示してあります。

用例は、この辞典の中でいちばんたいせつなものです。

用例は、その語の意味や用法がよく理解できるようなものから順（じゅん）にあげてあります。特にいつも特別の語といっしょに使われるものや、文法的な面で注意が必要なものは、その用例をあげるようにしました。

用例のむずかしさ、やさしさの点からは、用例を通してその語の意味・用法がよく理解でき、また、その用例を応用（おうよう）して表現するのに利用しやすいものをできるだけ多くあげ、あまり特別な使い方の例などはあげませんでした。

また、見出し語が活用語の場合には、その用例中になるべく多くの活用形を示すようにしました。

用例の多くは、その見出し語の使われている文の形によって示してありますが、他の語と結びついて一語となっている場合の例を示したものもあります。特に接頭語や接尾語はその例が多いです。（V 関連語を参照）語例をあげるときには、見出し語にあたる部分の意味が同じ場合には、一つの「○」のところに、つづけていくつかの語例を示したものがあります。

2 用例中の見出し語の扱（あつか）い

用例中の見出し語にあたる部分には、その下に「——」が引いてあります。

また、見出し語の発音が、前にくることばによって変わるような場合には、（ ）の中にその発音を示してあります。

例 「ほん〔本〕（接尾語）」の項（こう）。

1 本（いっばん）、2 本（にほん）、3 本（さんぽん）。

3 用例中の見出し語の表記

用例中の見出し語にあたる語の表記は、次のようにしてあります。

- ㊦ 見出し語の漢字表記が常用漢字表内の字であり、しかもその音訓が表の範囲内（はんいない）で書かれているときは、その漢字をそのまま使っています。

① ⑦以外のときはかなで書いてあります。

② ⑦の中でも、社会でかな書きが多く行われているものは、かなで書いてあります。

4 用例中のむずかしい語句の扱(あつか)い

用例の中に使ったことばで、理解することがむずかしいと思われるものには、原則としてその下に「~~~~」を引いて、意味・用法の説明の場合と同じように、そのことばのあとに、「(=)」に入れてその意味が示してあります。

Ⅳ 見出し語の意味・用法や用例についてのいろいろな注意

外国人がまちがえやすい例や、意味のよく似(に)ている他の語との使い分けなど、見出し語の意味・用法や用例についてのいろいろな注意が、用例のあと(関連語があれば、その前)にできるだけ示してあります。

⑦ 見出し語の意味・用法の説明が、品詞の別や意味・用法のちがいなどによって、いくつかの項(こう)に分けて行われているとき、それらのある項にだけ関係がある場合には、その項の一番終(お)わりに、「／／」に入れて記入してあります。

なお、ある用例だけに関係があるときは、その用例のあとにつづけて「／／」に入れて記入してあります。

④ 品詞の別や、意味・用法のちがいなどに関係なく、その見出し語全体に関する注意である場合には、「☆」をつけて用例のあとに示してあります。ただし、「Ⅰ、Ⅱ……」「1、2…」などと項(こう)が分けられていなければ見出し語全体に関する注意でも、「／／」に入れて示してあります。

Ⅴ 関連語

見出し語と意味や形の上で関係がある語で、見出し語としては取り上げなかった語を、「(関連語)」として、一番あとに示したものもあります。また、用例として用例の最後に示したものもあります。その中で、①は見出し語と形の上で同じ部分のある語です。②は形の上で共通の部分はないが、意味の点で関係のある語です。

Ⅵ 小見出し

ふつうの見出し語のあとに、形と意味の上でその見出し語と関係の深(ふか)い語を、少し小さい字で、一まとめにしてあげたものがあります。例えば、見出し語

「あお〔青〕」のあとに、「あおあおと〔青々と〕」「あおじろい〔青白い〕」「あおみ〔青み〕」「あおぞら〔青空〕」がつづけてあげてあるのがその例です。

これらの小さい字であげた見出し語は、その意味・用法の説明や用例が、ふつうの見出し語に比（くら）べて、やや簡単（かんたん）にしてあります。

また、このような小さい字の見出し語が、ふつうの見出し語の次につづけておかれたために、これらもふくめてみると、五十音順（じゅん）のならべ方が少しちがってきているところがあります。

Ⅶ 意味・用法の説明や用例などに使った漢字

意味・用法の説明や用例などに使った漢字は、特別な場合をのぞいて、常用漢字表内の字であって、しかもその音訓表によってみとめられているものだけです。そのとき、

- ㊦ 別表「この辞典に用いられている漢字」にあげた漢字で、その字の音訓としてみとめられている範囲内（はんいない）の音訓で使うときは、原則として読み仮名がつけてありません。
- ㊧ 別表以外の漢字を使ったときには、「（ ）」に入れて、その字の読み方が示してあります。

特別に、常用漢字表外の漢字を使ったり、また、表内であっても、音訓としてみとめられていない読み方をしたりするときにも、できるだけその読み方を「（ ）」に入れて示してあります。

THE AIM OF THIS DICTIONARY

1. This dictionary aims to provide appropriate explanations and examples of the usage of what is considered to be the basic vocabulary of the Japanese language. It has been compiled to help foreigners of Japanese achieve better results in their study of the language, and it is also hoped that it will be a helpful guide to Japanese teaching their native language to foreigners.
2. It is presumed that users of this dictionary will have studied the Japanese language for approximately 500 hours.
3. This dictionary aims not only to reinforce the users' knowledge of the words already learned, but also to expand the students' awareness of their usage. Consequently, this dictionary will hopefully be of use to the more advanced learner as well.
4. Bearing in mind the type of student expected to use this dictionary, we have not ventured to include a number of subtle variations of meaning which do occasionally arise in Japanese.
5. 4,500 words considered essential were selected by the Compilation Committee on the basis of the results of both vocabulary research and the usage of existing Japanese language texts. During selection, Special attention was given to word formation and those basic words necessary to the understanding of compounds.

363 characters have been selected for use in explanations and examples. This list, called "Characters used in this dictionary" is included in this dictionary.

6. In addition to the main body of the dictionary, the following appendices are also included.

- | | | | |
|-----|--|-----|----------------|
| (1) | Japanese Grammar | (2) | Word Formation |
| (3) | Family Terms | (4) | Counting |
| (5) | Demonstratives (<i>Ko-So-a-Do</i>) | | |
| (6) | Onomatopaeic Words | | |
| (7) | <i>On-Kun</i> List and <i>Joyo-Kanji</i> | | |
| (8) | Index | | |

ORGANIZATION OF THIS DICTIONARY

I Vocabulary entries (*midashigo*)

1. Writing

The entries are written in hiragana, except in the case of borrowed words which are usually written in katakana. The present-day orthography is observed. Pay attention to such words as the following. e.g.

おおきい【大きい】, おとうと【弟】, せんせい【先生】, つづく【続く】

2. Inflectives*¹ (*katsuyogo*)

Verbs and adjectives have a dot “.” between the stems (*gokan*)*² and inflected endings (*gobi*)*³. However, such verbs as “*suru*” and “*kuru*”, which are difficult to divide, are not marked with a dot “.”. e.g.

か・く【書く】, お・きる【起きる】, とりあつか・う【取り扱う】, ちいさ・い【小さい】

Adjective-verbs are listed in their stems. e.g.

きれい, にぎやか, しずか

Auxiliary verbs, when they can be divided into stems and inflected endings, have a dot “.” placed between them. e.g.

さ・せる, な・い, よう・だ

For *1, 2, 3, see the appendix “Japanese Grammar.”

3. Arrangement of entries

The entries are arranged in the order of 50 sounds (あ・い・う・え・お・か・き・く……) without differentiating between *hiragana* and *katakana*.

(a) *Kana* with “ゝ” (か, き, く, げ, ご), *kana* with “ゝ” (は, ひ, ふ, へ, ぼ) and those without them are treated indiscriminately. However, when they appear in the same situation, they are arranged as follows. e.g.

“は【葉】” precedes “ば【場】”

“はち【蜂】” precedes “ばち【罰】”

“はっと” precedes “ばっと”

(b) The small “っ” which indicates a double consonant as in “かっこう【学校】”, “きって【切手】”, etc. and small “ゃ”, “ゅ”, “ょ” which are used in contracted syllables as in “ちゃ【茶】”, “急【きゅう】”, “きょう【今日】” etc. are treated same as ordinary *kana*, but they are